■リーダーズ・ナウ［在学生インタビュー］

LEADERS NOW!

アスピレーションのままに 進学できる社会を

身体障がいを抱える人々の学びと願い

◉社会学研究科 社会学専攻
博士課程後期課程２年次生　**濱谷 美綺** さん

重度の身体障がいを抱えながら、関西大学の社会学部で学び、さらに大学院前期課程へと進み、現在、後期課程で研究を続けている社会学研究科の濱谷美綺さん。平日は毎日大学に通い、研究活動に励む。誰もが進学できる社会を願い、持ち前の向学心で挑むのは、自身も対峙した壁を打ち破ることだ。

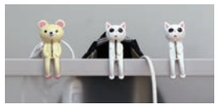
先天性ミオパチーは、生まれつき筋組織の形態に異常があり、「筋力が弱い」「体が柔らかい」などの筋力低下に関わる症状を引き起こす難病だ。濱谷さんは、先天的なこの病気により、車いすと人工呼吸器を使用しており、日常生活に介助が必要な状態だ。

濱谷さんには自分を常に前向きにしてくれるものがあった。それは勉強だ。「単に学ぶことが好きなだけ」と謙遜するが、中学生の時には、5教科でオール10の成績を修めるほどの勉強家。「将来は大学で学んでみたい」、そう望むのも当然だった。ところが、高校進学の段階で壁が立ちはだかる。公立高校ではエレベーターなどバリアフリー化の進んだ学校が少なく、私立高校も10校以上見学するが、「自立した生徒でないと、受け入れられない」と、面と向かって言われたこともあった。母は、特別支援学校にも足を運んでくれたが、大学進学のためのカリキュラムを組んでいるような学校はなかった。

▲普段勉強している学内の一室

ようやくたどり着いた大阪府立の高校でも、介助者探しに難航。主治医や学校に相談し、高校1年生の秋頃にサポートの環境が整ってきた。大学進学時には、家が近いことと、バリアフリーなどの環境面、学生相談・支援センターの存在がきっかけで、関西大学を受験。入試には困難を伴ったが、濱谷さんの取り組みと、試験会場での支援スタッフのサポートで、無事合格することができた。

「学部生の頃は、いろいろな授業を受けて、ゼミ合宿で明日香にも行き、とても楽しかった」とほほ笑む声は、充足感に満ちている。知識は深まり、視野も広がった。新しい友達もできた。それでも入学当初は、介助者をつけられないという問題にも直面。「障害福祉サービスを利用しようしたところ、そのサービスの制度上、学内での介助が認められなかった」。濱谷さんは本学学生相談・支援センターや市役所にも相談し、ねばり強く交渉。その努力が実り、介助者付き添いでのキャンパスライフが可能になった。



このような体験から着想したのが、現在までの研究テーマ「重度身体障がい者の大学進学」だ。修士論文では、修学における「環境」に焦点を当て、大学に進学した重度の身体障がい者にインタビュー調査を実施。やはり進学には設備面と、人的サポートが必要不可欠だと再認識した。学会で発表も行ったが、「十分な設備がなく、サポートが受けられないために希望どおりの進学をあきらめた人たち」と出会うにつけ、重度障がい者の進学を阻む壁の高さも改めて実感した。

そして今、大学院で研究を進めているのが「教育アスピレーション（強い願望）」について。大学へ進学した重度の身体障がい者と、進学しなかった重度の身体障がい者とをさまざまな観点から比較し、障がい者の教育や学習への願望の形成要因を明らかにしようとしている。「一般的に教育アスピレーションは、親の教育方針や先生との関わり方などに影響を受けると言われていますが、重度の身体障がい者の実情を知りたいと思っています」。

濱谷さんは、丁寧な研究を信条とする。「あまり高い目標を立てたりはせず、きっちり、一つ一つですね」。どんな壁も、一つ一つ確実にクリアしてきた半生そのままに、学問の道もしかりだ。世の中には、意欲がありながら、外的な要因によってそれを阻まれる人がいる。「そんな人を少しでも減らしたい」。最後にこれからの抱負をそう結んだ。

濱谷 美綺――はまたに みき
■1995年大阪府生まれ。大阪府立東淀川高校、関西大学社会学部卒業。先天性ミオパチーという難病を抱えながら、勉学に励み、2018年から関西大学大学院で同じ重度の身体障がい者の進学問題について研究している。

ゼミでの発表の様子

ふるさとの地勢から 防災に関心を持つ

能動的な姿勢が求められる学びの場

◉社会安全研究科 防災・減災専攻
博士課程前期課程１年次生　**山﨑 健司** さん

地震など災害による直接的・物理的な原因の死でなく、避難生活の身体的負担による病気の発症や大きな精神的ストレスにより亡くなることを指す“災害関連死”。山﨑健司さんはこの問題と持病との関係について研究に取り組み、学部時代には卒業論文を学会で発表、大学院でも研究をさらに掘り下げて極めている。

山﨑 健司――やまさき けんじ
■1999年高知県生まれ。土佐塾高校卒業。2022年関西大学社会安全学部卒業。学部在学中より「災害関連死と持病の関係」について研究を重ね、21年に日本自然災害学会で研究発表する。22年、地域安全学会にて奥村与志弘教授との共著となる論文「国際疾病分類を用いた災害関連死と持病・既往症の関係分析」は査読論文として認められる。

「私は高知県出身で、実家の目の前には海が広がっています。南海トラフ地震があれば甚大な被害を受け、津波の危険もある場所です。社会安全学部は防災が学べる日本で唯一の学部でしたので、ぜひそこで専門的に学びたいと思っていました」と話す、社会安全研究科の山﨑さん。

研究テーマは「災害関連死と持病の関係」。友人が重度の食物アレルギーを抱えていたこともあり、「災害に遭った時、持病がある人の生活はどう守られるのか？」と考えたことがきっかけだった。そして、より防災への意識を新たにしたのは、入学後すぐに発生した大阪府北部地震。ボランティアに奔走しながら、身近にも災害は起きるのだと改めて実感、研究への意欲がよりかき立てられ没頭していった。

4年次生の秋を過ぎた頃には、まとめた研究が認められ、学会で発表することに。「研究者コミュニティで発表できるなんて、学部生では異例のことで、これが自信につながりました。そしてもっと研究を続けたいという想いが募り、大学院への進学を決めました」。

▲フィールドワークでゼミ生たちと（前列右から2番目が山﨑さん）

▲奥村与志弘教授（左）に教えを受ける山﨑さん

▲社会安全学部 安全ミュージアムにて

大学院の同期は8名。学内進学者のほか、留学生や社会人もいる。いろいろな人と接することが新鮮だと楽しそうに話す山﨑さん。進学後は学部での研究テーマを継続し、卒業論文をさらにブラッシュアップした「国際疾病分類を用いた災害関連死と持病・既往症の関係分析」が学術的に価値のある査読論文として認められたことで、納得いく一つの研究成果をあげられたと感じている。

この論文の共著となった奥村与志弘教授は、山﨑さんの研究の源となる存在。「大学院への進学を考えた理由の一つが奥村先生です。防災・減災をどのように社会へ普及させていくのか、という問題を追求される姿を見て、先生の元でもっと学びたいと思いました」。大学院生となったことで、教授のフィールドワークに同行する機会も増えた。現場の声を聞くことで、座学だけでは学べない貴重な体験を得ると共に、教授からは「人としての生き方」も学んでいるという。「自分から進んで全国をついて回っています（笑）。『自ら学びを探しに行く』というのは、大学院で求められることの一つ。能動的に学ぶ姿勢が大事だと思っています」。

▲足湯ボランティア活動の様子（右端が山﨑さん）

現在は日曜や祝日も関係なく取り組んでいる研究の合間に、後輩となる学部生の指導を行うほか、学内のITセンターなどでも業務補助をする忙しい毎日。コロナ禍前に行っていた「足湯ボランティア」も早く再開したい、と東奔西走の毎日を送るが、自分のやりたいことばかりなので苦になるどころか、日々充実していると感じている。「さまざまな出会いの機会が多いのは大学院のメリット。視野も広がるので、自分の可能性も広がりますよ」と後輩へメッセージを送る。

山﨑さんも自身の可能性を探っている真最中。和歌山の介護施設で携わっているBCP（事業継続計画）の作成や、学会の懇親会で話を聞いたJICA青年海外協力隊など、やりたいことや興味のあることは数々ある。「大学院に入って新しく知る世界や多角的に考える機会も増えたので、将来の自分を考えると楽しみで仕方ありません」。